セミナー１
10 月 19 日(木)10:45-12:15
「ソーシャルワーク実践を再考する～ソーシャルワーカーは、どう生き残るのか～」 広島文化学園大学看護学部看護学科教授　　大塚　文

「10～20 年後、国内の約 49%の職業はコンピューターで代替可能」という試算が話題となった。代替困難な職業の 1 つに医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）も挙げられていたが、生き残れると喜ぶ前に、「どう生き残るのか」が懸念される。先日、「MSW は患者ではなく所属する病院の利益ばかり考えている」という指摘を一般市民から受けた。衝撃だったが反論できなかったのは、私自身が MSW の現状に深く悩んだ 1 人であったからだ。

1960 年代以降、医療における「自己決定」の問題は、その具現化の 1 つであるインフォームド・コンセントを得ることで、患者の自律尊重と医療費軽減の両方に寄与したと言われる。この多死の時代に、「地域包括ケアシステム」も、同じくこの相互利益を生む例なのだろうか。住み慣れた場所での生活と終焉は人々の切実な願いであり、同時に病院での療養・死亡に比して医療費用軽減が期待できるという。しかし、国が強調する地域包括ケアによる「その人らしさの実現」に至る経緯では、選択・決定の自由はかき消されている感がある。

リハビリテーションを含む医療は分断され、在院日数に翻弄される。忙しない移動が当たり前の医療では、患者は類型となり生活者という認識は薄れる。時間のなさは、患者・家族と専門職が共に医療遂行や生活を考え決定する機会や経過を保障できない。専門職はコミュニケーションの術を忘れ、指示し管理することに慣れていく。アドボカシーについては、言わずもがなであろう。この厳しい現状は、患者・家族のみならず、専門職とその価値をも深く傷つけている。

このような中、MSW はどのような立ち位置を取るべきか。先人の実践・理論等を参考に、ソーシャルワーク実践の過去・現在を再考し、未来に向けて私見を述べる。MSW として、医療というスペシフィックな領域を超え、ソーシャルワーク全体に貫通的に通用するジェネリック・ソーシャルワークにおける「ソーシャルワーカー」を意識する重要性に言及する。

講師略歴

昭和 50 年 3 月　福岡県立小倉高等学校　普通科　卒業
昭和 55 年 3 月　広島女子大学（現　県立広島大学）文学部社会福祉学科　卒業
平成 23 年 3 月　福岡県立大学　人間社会学研究科　社会福祉専攻修了　修士（社会福祉）
平成 26 年 3 月　熊本大学　社会文化科学研究科　人間・社会科学専攻　先端倫理学領修了
博士（学術）

昭和 55 年 4 月　黒崎クリニック（現はまゆう会　新王子病院）に医療ソーシャルワーカーとして入職
昭和 56 年 11 月　同クリニック退職
昭和 56 年 12 月　労働福祉事業団（現労働者健康安全機構）九州労災病院リハビリテーション科に医療ソーシャルワーカーとして入職
平成 15 年 7 月　同病院　地域医療連携室に配置換え
平成 28 年 3 月　同病院　退職
平成 28 年 4 月　広島文化学園大学 看護学部 看護学科に入職　現在に至る

福岡県高次脳機能障害相談支援体制連携調整委員会　委員
北九州市地域リハビリテーションケース会議　実行委員
日本医療社会福祉協会　理事
労働者健康安全機構　両立支援コーディネーター基礎研修　講師
筑波記念病院　スーパーバイザー　非常勤
福岡県社会福祉会　認定社会福祉士研修　講師
福岡県医療ソーシャルワーカー協会　基礎講座・アドバンス講座　講師
北九州 MSW 研究会　世話人

所属学会
日本医療ソーシャルワーク学会
日本医療社会福祉学会